
Fate/Je suis inconnu

ピロシキィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / J e s u i s i n c o n n u

【Nコード】

N 2 2 9 6 Z

【作者名】

ピロシキィ

【あらすじ】

どっかの世界の英雄が転生して一般人（自称）として生活していたら、聖杯戦争に巻き込まれました。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

お手柔らかにお願いします。

プロローグ

夢を見た

片田舎にある村で生まれ、
いつか世界を見て回ろうと夢想した幼年の頃

夢を見た

村の近くで拾った剣を只管、振り続けていた少年の頃

夢を見た

何もかもが光に満ち、自信に満ち溢れ
村を飛び出した少年と青年の間の頃

夢を見た

冒険者として駆け出し、己が道を信じ走り抜けた頃

夢を見た

一人、二人と、仲間が増え続け何時しか傭兵団として、
名を馳せていた青年の頃

夢を見た

数多の戦場を駆け、常勝不敗の褒美にと小国の姫を娶った頃

夢を見た

自分が王と成り、王国の栄華を齎した賢王と謳われた晩年の頃

英雄と呼ばれる者達の末路は非業の最期と言われるが、余は如何であつたらうか。

今は病床に臥せる我が身なれど充足感に包まれておる。なれば余は英雄ではないのだらう。

長き道程は想い歸せば一条の光の如し。

我が生涯に意味を成せたか、或いは無価値か。

それは余が死んでから歴史家達が創ること。

多くのものを手にし、そして零れ落ちたが、歩んだ道に後悔など何一つも無く……

余は……いや俺は……最高に愉しい人生であつたと。

さあ、我が物語はここら終りぞ。

「……誰ぞ、我が剣を持って」

もう握る力も残っておらんが、
最期は生涯の戦友と共に往こう。

銘も無き王の剣 よ。

何処かの世界、何処かの国の王がその波瀾に満ちた生涯を終えた。

バイト行かねば

薄手のカーテンより朝日が差込み、ぼやける視界の元、
徐々に意識が覚醒していく。

「……………」

ここ最近、何故か頻繁に妙な夢を見る。

‘妙な夢’というと語弊があるな、あれは記憶だ。
魂に刻まれた前世の記憶。

輪廻転生、三界流転、流転輪廻、転生輪廻

読み方と多少の意味は違えど、人は生と死を繰り返し続ける。

生まれは死に、死には生まれ、その輪を回り続けるという事らしい。

つまり俺が何を云いたいかというと、

俺にはその『前世の記憶』があると。

我が生涯に一片の悔い無し の大往生を遂げた思ったら、

薄ら明るい光だけを感じふわふわとずっと微睡みの中にいる感覚が
今、考えれば一年ほどあったのだらうと思う。

当時は時間の感覚など無かったから、その頃はまだよかった……。

それから徐々に徐々にと自我と感覚が出来てきて、いや目覚めてき
て、

あれ、俺もしかして赤ん坊になってる？

気付いてしまっただけからは大いに狼狽えた。

いきなり赤ん坊。いやほんと参った。

口も満足に動かす事も出来ず、言いたいことも言えず泣き喚く。

排泄行為も儘ならない。前世の死ぬ前より酷い。まさに羞恥。此れほどの屈辱を未だ嘗て味わっただろうか！？否、前世の生まれた頃も同じようであったろうがその頃の記憶は無いので断じて否である。

暗黒歴史トシテ我が記憶ノ奥底ニ封印ス。

兎に角、『前世の記憶』がある状態で再スタートした訳だが幼少の頃は体が弱かった。

これは俺の推論だが、まだ出来立てホヤホヤの小さな器に九十余年の人生の記憶が、入れば耐えられないだろ。

お猪口にバケツ一杯の水は入りませんよ。という事だ。

俺には自覚が無いというよりは「何かダリイな」位に感じてただけだが、

生死の境を何度か彷徨っていたらしい。うん良く生きられたな。

お袋さんが「アンタは小さい頃、散々心配かけたんだから、もう今後は心配してやんない」

と中学校に入った頃仰いました。

そして一人息子置いて単身赴任中の我が父上様と遠い地で暮らしている。

……なんて親だ。

まあ無事ここまで育ててくれたんだ何も言うまい。

俺も俺で子供らしくない子供だっただろうから。

よく言えばとても賢い子供、悪く言えば老成していたといえる。

あまり手をかけることは無かった筈だ。

しかし、『前世の記憶』というのは生きていく、成長する過程で弊害になることが多い。

言葉はまあ生まれた頃から何年も聞いてりや覚えられる、若干他の子供と比べると喋れるようになるのが遅かったらしいが。文字は大変だったな。頑張って勉強しましたよ。義務教育有難う。というか教育水準の高さに驚きた。

習慣や風習、文化に文明や伝統的行事に歴史は新鮮の一言だが、前世の概念があるからかなり戸惑いを覚えた。

そして、この世界の歴史を見たとき驚愕した。

世界は違えど人は争うものだ、戦争はあるだろうと思っていた。しかも何度も繰り返すのものだとも分かっていたが、

しかしこの数は異常だ。そもそも世界の人口からして違うが

ここまで戦死者が出るものなのか、それでも未だに世界のどこかで戦争をしているのだ。人とは業の深い生き物だと改めて感じた。

今の一学生である身分の俺が考えても詮無き事だが、

文明というかこの世界の科学というものは非常に恐ろしい。

効率的に大量に人を殺せる兵器とか最もたる物。

兵器じゃなくて生活に密着する科学は超便利だし、

いやもうテレビやゲーム電気製品全般、俺も今じゃ無くちゃ生活できないが、

自堕落してしまうなんて恐ろしいのだ科学とは。出来れば部屋に引き籠って一日中、

快適な温度に設定された部屋で歴史小説や漫画を読み、ネットにゲームをして過していたい。

進路希望の紙に「自宅警備員」又は「ニート界の神」と書きたい。きつと担任葛木あたりに説教食らうだろうが。

いやアイツは何考えてるか分からないから「そうか」の一言でも終わりそうな気もする。

……うん。試してみよう。

ただ葛木がどんな反応を示すのか見ただけ。
自堕落な生活が送れるほどのマネーも無いし、
両親に迷惑をかけるわけにもいかない。
そしてこの世界も見て回りたいという夢がある。
一日あれば地球の裏側までいけるんだ。
前世より時間的には世界は狭い。いろんな国を見て回る。
ほんとにそう考えると、この世界は発達し繁栄するといえるのだ
ろう。

魔法から科学に成り代ったのか、それとも元から魔法という概念な
ど無かったのか。

しかし歴史を見れば魔女狩りや異端審問などとは古い文献に妖術
や仙術に忍法など

名前が違えどそれっぽいものがちよくちよく出てくるのだ。

それを題材にした漫画や物語もなかなか面白いし、興味深いところ
もある。

現に前世ほどではないにしろ魔素は存在している。

俺は前者のほうがり得そうだと思う。

もっともこの様な事を言えば「厨二病はもう卒業しろ」などと言わ
れるだろう。

だが、しかし俺の前世は剣と魔法がガチな世界であったのだ。

所謂ファンタジーな世界。ドラ エやエフエ のような世界であり、
人間以外にエルフやドワーフ、獣人 多種族のこっちで言う知的生
命体がいたわけだ。

他にも竜や魔王に精霊なんかも居た。

それがこちらでは御伽話で存在すると言うのは偶然なのか。

もしかしたら俺と同じような存在が何処かに居るのかもしれない。

居ても居なくても世界を見て回り……………。

あれ、なんか思考が完全に深みに嵌っているぞ。

何ゆえここまで深みに嵌った？

……そうそう最近やたらと前世の夢を見るってのが切欠か。

それに最近やたらと身体能力が上がってきている。

成長期つてレベルじゃないですよ最早、人外です。

もともと魔素を体内に取り込み魔法をぶつ放す事も出来たし、取り込んだ魔素で一時的な肉体強化ブーストできたから最初から人外だったかも…。

いやいや、それにしたってここ最近の成長は尋常じゃない。

100mを本気で走れば金メダル確定位だったのが

今じゃ8秒切るし、ブーストつかった日にゃ2秒とか有り得へん。

やった時は思わず乾いた笑いが出たぜ。

もちろん人が居るときは常識の範囲内で運動神経がいくくらいの力しか出してない。

この急成長は夢と関係がありそうなんだが、生憎と相談できる相手が居ないのが現実だ。

「なあ俺さ最近前世の夢頻繁に見るんだけど、何でだと思っ？」

……無理だろ。

心配されるか、苦笑いで済むか、それとも軽蔑された目で見られるか。

都市伝説の黄色い救急車呼ばれるかもしれん。

……どうにも成らないわ、切り替えよう。

おっと変な思考の海に沈んでいたら結構いい時間じゃないか。

そろそろ起きるか。

うっ寒っ。

雪が積もることが無い地域とはいえ冬はやはり寒い。
でもバイトに向かわねば。

仕方ない布団から抜け出すとしよう。

学園は遅刻してもバイトは遅刻しないこれ俺の信条。

ヨッ！勤労学生の鏡っ！

と鏡の前で身嗜みを整えながら馬鹿なことを考えるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2296z/>

Fate/Je suis inconnu

2011年12月8日05時06分発行